アジア太平洋フォーラム・淡路会議 最終回を開催しました

アジア太平洋フォーラム・淡路会議は、阪神・淡路大震災からの創造的復興が進む2000年に、淡路夢舞台において、安藤忠雄、五百旗頭真、貝原俊民の3氏が発起人となり、井植敏氏を代表理事に発足しました。それ以降四半世紀にわたり、新型コロナウイルス感染症の影響で中止を余儀なくされたときを除き、毎年夏に開催してきましたが、去る7月31日と8月1日に開催された第26回をもって終了することとなりました。

最終日には、国際フォーラムの時間を繰り上げ、最後に、参加者がこれまでの淡路会議の活動を振り返る時間を設け、淡路会議に功績のあった方々に感謝状を贈呈し、25年間の活動に終止符を打ちました。

会場全体

1　アジア太平洋研究賞授賞式

授賞式

1日目のアジア太平洋研究賞の授賞式では、本賞に輝いた留学生の周俊さんと、佳作の団陽子さんに牧村代表理事から表彰状が授与されました。また本賞のザヘラ　モハッラミプールさんと佳作の西浦まどかさんは欠席でしたが、西浦さんについては推薦者である東京大学大学院の名和克郎教授が代理で受領されました。

選考理由説明では、片山裕選考委員長から、今回は応募数が33件とはじめて30件を超え過去最多になった、そればかりか論文の水準も例年以上で、審査委員は苦労もしたが大変喜ばしいとの話がありました。

片山先生

2　国際フォーラム・記念講演

2日日の国際フォーラムでは、開会後、同志社大学の村田晃嗣教授と、ひょうご震災記念21世紀研究機構の阿部茂行参与から記念講演をいただきました。村田教授の講演「トランプ2.0の激震と世界」では、「今我々は、過去をあまりにも理想化し、今日を途方もない厳しい状況に直面しているかのようなトランプ劇場を見せられているが、トランプ政権の基盤は脆弱であり、政策に矛盾があることも明らかである。政権はあと3年半、時間のないのが泣き所となっている。一方で、トランプ政権は暴言を繰り返していても、2～3割はまともなことを言っている。トランプ主義を目的と手段に分けてみると、目的は過半数の賛成を得ていて、手段に6割以上が反対している。手段にオータナティブが提示できれば、トランプ主義は変わるかもしれない。トランプ政権に対処するには、判断を急がずに曖昧さに耐える能力、ネガティブ・リテラシーを培うことが求められる」と指摘されました。最後には、今後も続くこととなった研究賞に触れられ、「スーパーマンの五百旗頭先生は戻らないが、我々が努力を続けて行けば必ずやり遂げられる」と意気込みを語られました。

村田先生

阿部先生

続いて阿部参与の講演「アジア太平洋地域と日本の経済の30年」では、対米経済関係について固定相場制の時代から説き起こし、日米貿易摩擦に続いて米中貿易摩擦へと展開し、これらをきっかけとして、メキシコやASEAN諸国などに生産拠点が移転していった経緯に触れた後、グローバルサプライチェーンでは、アメリカが担う研究開発やマーケティングとは異なり、生産工程の中間にあたる加工・組立ては付加価値が低いことなどを説明されました。またトランプが関税に訴えたのは、アメリカが世界の貿易赤字を1国で引き受けている状況ではあったものの、これは財の貿易だけであって、サービスの貿易ではアメリカは赤字でないこと、さらにトランプは、為替レートの引き下げをねらってFRBに金利引き下げを働きかけていることなど、トランプ関税の背景にある事実についても解説いただきました。阿部参与は、これらを踏まえて、日本のなすべきこととして、アメリカだけに依存しない経済安全保障のほか、Tobin税の導入やGAFAへの課税についても言及されました。

3　国際フォーラム・基調提案

午後からは、3テーマについて3名の講師から基調提案をいただきました。

吉岡講師

1つ目の、「対立の世紀は乗り越えられるか」では、講師の吉岡桂子さんが、初めて北京へ特派員として派遣された頃、中国とは競争、共存のどちらかという選択肢はないという五百旗頭先生の教えを胸に、両方を両立させようと取材に臨んだ経験を語られました。

上野先生

続いて、上野千鶴子東京大学名誉教授による「日本社会とジェンダー:女性を活かさない社会に未来はない」の講演では、先生は、1985年の男女雇用機会均等法、労働者派遣法、国民年金第3号被保険者制度の創設の3点改革は、結局、女性を排除する効果を持ったのだと断じられました。

室﨑先生

最後は、阪神・淡路大震災から30年に当たる本年まで、創造的復興の推進から復興のフォローアップにわたり長らくご指導をいただいてきた室﨑益輝神戸大学名誉教授による「震災30年の復興を振り返り、これからの災害に備える」の講演でした。先生は30年を振り返って、「市民活動や防災教育は進んできたけれど、阪神・淡路の教訓である『市民の助け合い』が社会に実装されたわけではない。いま地球温暖化に伴い災害が進化している中で、防災は遅れており大転換が必要である。それには、複眼的視野を持ち、ゼロリスクを求めるのではなく、人間中心の仕組みに切り替えていく必要がある」と説かれました。

4　25年の振り返り

分科会報告の後、最後の1時間は、参加者全員で25年間を振り返る時間としました。

まず、淡路会議の25年のあゆみを辿るスライドを上映しました。2000年に発足した淡路会議では、国内外から様々な個性が集い、激動する国際経済への対応、環境、資源・エネルギー問題、IT(情報技術)、災害への備えなど多岐にわたるテーマについて議論するとともに、多文化共生社会の実現を目指して、提言と対話を積み重ねてきました。

これからも淡路会議の取り組みを受け継いで、様々な地域で様々な人々により国境を越えた交流の輪が広がることを願いつつ、最後にこれまで献身的に淡路会議を導いてこられた五百旗頭先生に追悼の誠と深甚の感謝を捧げました。

その後、淡路会議の25年間の活動に対する功労者の皆様方に、牧村代表理事から感謝状が贈呈されました。まず創設以来、長年にわたり代表理事としてご指導いただいた井植敏さんと、共催者として淡路会議を共同運営していただいた公益財団法人井植記念会様には、ご子息の井植記念会理事の井植敏雅さんにお受け取りいただきました。

次に、前代表理事で昨年3月に急逝された故五百旗頭真さん。五百旗頭先生は発起人として設立に関わられ、研究委員会委員長、研究賞選考委員長として、また井植敏さんの後の代表理事として、淡路会議および研究賞の企画運営に中心的役割を果たしていただきました。感謝状はご息女の安井さやかさんに受領していただきました。

続いて、阿部茂行企画研究委員長と、片山裕研究賞選考委員長にお受け取りいただきました。両先生は会議発足当初から五百旗頭先生とともに会議の企画運営に携わるとともに、五百旗頭先生亡き後は前面に立って会議を引っ張ってきていただきました。

そして、淡路会議の趣旨に賛同し協賛をいただいた、UCCジャパン株式会社、和田興産株式会社、シスメックス株式会社の各社の代表の方に感謝状をお受け取りいただきました。

受賞者のあいさつでは、井植敏雅氏が「父はこの会議で何かを発信しようと本気だった。ここで積み上げた成果が次世代への、世界へのメッセージとなることを願います」と述べられました。また、片山裕選考委員長は、「あれだけの人たちが議論して淡路からメッセージとして発信したことは奇跡のようなことだった。五百旗頭先生のご努力と影響力があってはじめて成し遂げられたことである。自分としても人生の大事な時期にこの会議の一員となれたことに感謝している」と述べられました。

井植理事長

安井さやか氏

最後に、阿部茂行企画研究委員長から、この日の総括とともに25年間の締めくくりのあいさつをいただきました。先生はまず、「今感無量の気分である。五百旗頭先生からのお誘いで淡路会議に参加して、その後ずっと兵庫県と関わることができて嬉しかった」。最終回の活動を総括していただいた後、最後に、「淡路会議は今回で終了となるが、幸いなことに研究賞は残る。多文化共生の概念、アジア太平洋の枠組み、兵庫県からの発信を守っていきたい。自分も最初から関わってきて、いまフリーアゲイン、五百旗頭先生の遺志を受け継いで、何か貢献できないか心の中に芽生えている」と力強い言葉で締めくくっていただきました。